俳句の初歩

正岡子規

青空文庫

客あり。草蘆を敲いて俳句を談ず。その標準は誤り、その嗜好は俗に、称揚する所の句と指斥する所の句と多くは彼此顛倒せり。予曰く、子の言ふ所、悉く予の感ずる所と相反す。予を以て見れば子の言甚だ幼稚なり。もし子もまた予を以て俳句を解せざる者となさば予はことさらに是非を争はざるべし。しかれども子が言を以て予が俳句に入らんとせし十数年前と対照するに、当時の予の意見と符節を合すが如き者あり。あるいは十数年前の予にして子と会談せしならんには、手を拍つて子の説を賛成したらんも、爾後予の嗜好は月々歳々に変じて、今は復当時の余波をだに留めざるに至れり。子が説く所果して正しきか。予が嗜好の変遷はかへつて正路を脱して邪路に陥りたるか。感情に本づく美の正否は、固より理論を以て窮むべきにあらず、経験の多寡を以て判ずべきにあらずといへども、普通の道理より推せば、予が十年の経験と研究とは、予をして全く邪路に陥らしめをはれりとは信ずる能はず。縦し予の嗜好の変遷にして往々邪路に迷ふことありとするも、十年前の嗜好が十年後の嗜好よりも高尚に、俳句界に入りし当時の標準が、幾多の研究を経し今日の標準よりも正確なりとは信ずる能はず。果して予に一日の長あらんか、予は子のために十年前の懺悔談を為して参考に供せんとす。子聴くや否や。

予の初め俳句に入るや、自ら思ひ立ちて入りしに非ず、人に勧められて入りしに非ず。師に就くに非ず、友と共にするに非ず。たまたま一、二巻の俳書を見る、敢て研究せず、熟読せず、

句の解せざる者十中に九、乃ち巻を抛つて他を為す。戯れに一、二の俳句を作る、趣味において得る所あるに非ず、語句において練る所あるに非ず、あるいは縁語、駄洒落に思ひを凝らし、あるいは極めて浅薄陳腐なる意匠を繰り返して独り自ら喜ぶ。それすら一、二句を得れば即ち思想涸渇して復一字を吐く能はず。あるいは奉納の行燈に立ち寄りて俗句に感ぜし事もあり、あるいは月並の巻を見て宗匠輩の選評を信仰せし事もあり。我に句なし、彼の句を妙と称す。自ら標準を立てず、他の標準を正しと為す。俳句に心ざす所あらざりしとはいへ、実におろかにあさはかなる少年にてありき。

嘘から出た誠とやら、かかる戯れに一時の興を取りし予は、或る時一の俳書を見てふと面白しと思ひぬ。中には身に入みて感ずる句さへありしかば、ただその句、その書を面白しと思ふのみならず、俳句といふ者を面白しとまで思ひなりぬ。これ予の俳句に入る第一歩にして、しかもこの時の予はいまだ俳句の趣味の大体をも解せず、俳句固有の句法をも解せず、僅に俳句の一小部分を解したるのみ。一小部分とは何ぞ。即ち予がここに述べんとする所なり。

当時予が●好み●し●所●の●句●につき、これを数箇条に分ちて左に説明すべし。

（一）　理窟を含みたる句　理窟に美を含まざるは論を待たず。もし理窟に美ありといふ人あらば、その人は必ず美を解せざる人ならん。いやしくも理窟以外に多少の美を認めたる者は、理窟に美ある事を許さざるべし。しかして当時の予は実にこの必要なる一事をも解せざりしなり。理窟を含みたる俳句といふ、いかに理窟多しとも、既に俳句といふ上は幾何の文学趣味を

含まざるはあらず。もし理窟的俳句に美ありとすれば、その美は理窟の部分にあらずして、文学的の部分にあるべきはずなり。当時予が好みし中には

物いへば唇寒(くちびる)し秋の風　芭蕉
葉隠れて見ても朝顔の浮世かな　野坡(やば)
世の中は三日見ぬ間に桜かな　蓼太(りょうた)

の如きあり。もしこれのみならんには、あるいはこの句の文学趣味の上に取るべき所ありて取りたりとも見るを得ん。しかれどもこれと同時に予の好みし句には

よつひくは勇なり放たぬは仁なり
智の一つ足らでをかしき案山子(かかし)かな　楽翁

の如きあり。この句は五七五の音調を除きて外は純粋の理窟より成る者にて、この句の文学趣味として目すべき者は針のさきほどもあらざるに、予はこの句を好みたりとすれば、当時の予の嗜好は純粋の理窟の上に美を認めたる者なり。しかれども理窟の上に美のあるべき道理なければ、その美と認めたるは真の美に非ずして、知識の上より生ずる一種の快感を美と誤認せし

なり。知識の上より生ずる快感は謎を解き、数学の問題を解きたる時に生ずる快感の類にして、むつかしき書物（殊に外国語の書物）を漸く読み得し時の快感もまたこの種に属す。芭蕉の秋風の句は世間にて往々過賞を蒙れども、こは口は禍の門といへる極めて陳腐なる理窟を十七字に並べたるに過ぎず。世人は理窟なるが故にこれを賞する者にして、もし理窟ならざりせばこれを賞せざるべし。かつ陳腐なる理窟なるが故にこれを賞する者にして、新しき理窟ならばこれを賞せざるべし。何故といふに世人はこの句を読んで、自己がかつてより知り得たる理窟に遭遇したるがために愉快を感ずる者にして、その愉快は外国の書物の中に、自己が解し得る語に遭遇したる時の愉快と同じく、知識の上より来る者なり。感情の上より来る美感と全く種類を異にす。これらの句縦し幾多の文学的技倆を現し得たりとも、根本において理窟に陥る者、特にこれを賞するは美を解せざるがためなり。

（二）　譬喩の句　譬喩の句は一事物を以て他の一事物と比較する者なるが故に、比較といふ知識上の作用を要す。予が譬喩の句を好みしはこの知識上の作用、即ち理窟を含みしがためたり。譬喩の中にも比較すべき両個の事物を並べたる

茶の花や利休が目には吉野山　　素堂

の如きあり。予は当時この無趣味なる句を以て、茶の花を詠ずる空前絶後の名句なりと思へり。

これを賞するは今より見て殆ど不思議なるが如くなれども、物を解せざる時の愚かさを回顧すれば、多くこの類ならざるはなし。譬喩の句には右の如く両事物を対したるは稀にして、比較すべき他の一事物はこれ句中に現さぬが多し。例へば

手に取るなやはり野に置け蓮華草
精出せば氷る間も無し水車
　姑むつかしといふ人に示す
けむくとものちは寐易き蚊遣かな　　不角

の如く表面には蓮華草、水車、または蚊遣を詠みたるのみなれど、各裏面に教訓の意を寓するが如し。譬喩には多少の理窟あれども、趣味を主としたる譬喩は全く殺風景なる者に非ず。しかるに右三句の如きは、譬喩といふ理窟の上に教訓といふ理窟を加へたる者なれば、その無味索莫たるはあらためて言ふまでもなし。されど当時の予はこれを好み、今なほ俗人のこれを称するを聞く。

浮草やけさはあちらの岸に咲く　　乙由

こは無常の意を寓したるなり。無常は教訓の如く理窟めきたる者には非れども、無常はやや長き時間を含み、俳句は長き時間を写すに適せざるが故に多く殺風景となる。かつて予が賞讃し、今なほ俗人の劇賞する乙由の句の如き、固より浅薄見るに足らざるのみ。

この外譬喩の句にして予の劇賞せし者は、婦女子殊に遊女等が自己の境遇を詠みし句にして、この種の句には多少の愛すべき思想なきにあらねど、多くは素人の作なるを以て、語句の間に瑕瑾を存す。当時予はこれを識別するの力なかりき。

始めて嫁ぐ時
渋かろか知らねど柿の初ちぎり　　千代

客より凧を送りこしたる返事に

御約束の凧御こし下され、早く揚て見参らせたく、こよなう嬉敷ぞんじまゐらせ候、此猩々凧こそ乙女の姿には似ずとも、雲の通ひ路ふら〳〵としてどこをまひぶみせんとてか、さりとてはあぶなく見えて、一枚凧のすわらぬやうにみだれ足とやらんはよほど酔てのことか、しかし盃と柄杓落さぬはほ

んの乱れ足とも見えず、又かたぶけんとや、清玄凧のにくげになまづ凧のおどろ〳〵しきにからまりて、落ちてやぶられやせんと心ぐるしきうちに、風もかはりて猩々舞をやめてゑびすくふわざもをかし、いとめのちがはぬうちにはや〳〵おろしてたも

あげられてくるしき日あり凧（いかのぼり）　瀬川

伏猪を画いて客の賛せよと望みけるに

気にそまぬ客と思ひ

猪にだかれて寝たり萩の花　高尾

これら皆作者のさだかならぬのみならず、語句の上はいづれも疵（きず）あり。されど予はこれをこよなき名句と思ひ、殊に伏猪に萩の一句を愛（め）でて、人間の至情を尽し俳句の巧妙を極めたる古今無比の句なりとまで思へり。予のかく称讃せしは第一に作者が婦女子なる事、第二に人情（後にいふ）を含む事、第三に作者実際の境遇より出でたりと思ふがために同情を惹（ひ）く多き事、等に因る者にして、もし予をして幾何か俳句の高遠なる趣味、写実的無理想の趣味を解し、語句の練磨に●多少の心を●傾●けしめば、これらの句に対する感情は今少し冷淡なる者ありしならん。

（三）　擬人法を用ゐし句

手をついて歌申しあぐる蛙かな　宗鑑
はづかしや蓮に見られて居る心　湖春

湖春の句は擬人法を用ゐし処に巧妙を感じたれど、半ば蓮につきての理想を描き出だせし処に、我嗜好を惹きし者ありしなるべし。宗鑑の句は初め面白しとも思はざりしが、或る情史（柳の横櫛といふ者なりけん）の中の見出しにこの句を置き、その下に番頭が若旦那の不身持を諫むる事を書きしを見しより、忽ちこの句に味を生じたるが如き心地せり。けだし譬喩に用ゐられしがためなり。「提灯の空にせんなし時鳥」も譬喩の句に非れども、同じ書に譬喩的に引用せられしために、それより我記憶をはなれぬ句となれり。されば最初には予の嗜好はむしろ擬人法の上にあらざりしが如くなりしも、僅に一歩を進めたる後は、擬人法は最も愛すべき手段として用ゐられ、擬人法の句ならばとにかくに一誦の価あるが如く思へり。この弊は近年に至るまで予の胸底に蟠りて長く害毒を流したり。俗宗匠輩またこの法を慣用する者多し。擬人法必ずしも悪しとにはあらねど、譬喩と同じく理窟に傾きやすく俚俗に陥りやすき者なれば、これを作るには注意を要す。山笑、山眠などいへる題にて佳句を得がたきは、その題の擬人的なるが故なり。

（四）　人情を現したる句　俳句を知らぬ人もし或る俳句を劇賞したりと聞かば、その俳句は

理窟の句か、譬喩の句か、しからざれば人情を現したる句なること問はずとも知るべし。予もまたこの種の句にうつつをぬかしたる一人なり。人情は文学には極めて必要なる者にて、小説の如き、演劇の如き、一歩も人情の外に出づる能はず。俳句にもまた人情を嫌ふに非ず。人情は譬喩等の如く理窟を含む者に非れば、毫も美以外の分子を有する事なし。されど人情は極めて複雑にして、到底十七、八字の短文字にてこれを描写する事難く、たまたま巧にこれを描写したる者ありとも、そは俳句に適当なる或る簡単なる場合の、しかも陳腐ならざる者を択みたる者なれば、多数に見出だし得べきに非るなり。予が愛したる句

夏痩(なつやせ)と答へてあとは涙かな　　季吟
　君は今駒形あたりほとゝぎす　　高尾
魂棚(たまだな)の奥なつかしや親の顔　　去来
　井の端の桜あぶなし酒の酔　　秋色
　信章江戸より下るに
いや見せじ富士を見た目に日枝の雪　　季吟
　芭蕉翁をとゞめて
　我宿は蚊のちひさきを馳走かな
　　夫におくれて　　秋之坊(あきのぼう)

起きて見つ寐て見つ蚊帳の広さかな　　千代（？）

の如きは品格の高卑こそあれ、いづれも悪句俗句に非ずして、むしろ佳句に属すべき者多し。されば予がこの種の句を愛せしは、全くその標準を誤る者にはあらざれど、この種の句ばかりを愛せしは、いまだ俳句を解せざりしがためにして、当時古俳書を見て尽くつまらぬ句の如く思ひしは、我嗜好の狭かりしを証するに足る。けだし人情的俳句は全俳句の百分の一をも占領せざるべし。●●●人情は到底俳句の材料として普通なる能はず。

（五）　天然の美を誇張的に形容したる句　天然の美、殊に花樹花草の美は何人（なんぴと）もこれを感ぜざるはあらず、予は特にこれに感じやすき性あり。しかれどもこの時はなほ写実的の趣味を解する能はざりしを以て、誇張的に形容したる者のみを好めり。

散る花の音聞く程の深山（みやま）かな　　心敬

深山の静かさを現さんとて花といふ美しき材料を用ゐたるは、幾何の美を捉へ得たる者なれど、「花の音」といふに至りては誇張に過ぎてかへつて趣味を失ふ。花の音なる者実際に有り得べからざるを以て、「花の音」といへば既に人間の偽りといふ一種の悪感情を感じ来るなり。偽りも御伽話（おとぎばなし）の「舌切雀」「猿蟹合戦」「桃太郎」の如く、または白髪三千丈といふが如く、

分りきつたる偽りは悪からず。これに反して誠らしき嘘は人を欺(あざむ)かんとする傾きありて不愉快なる者なり。誇張は多く後の種類に属す。されど当時予はこの句を以て俳句中の最微妙(もつとも)なる者と思へり。もし感情に訴へたらばさる誤りは生ぜざるべきも、予はかへつて知識（理窟）に訴へて誇張の処に愉快を求めたりしが如し。

我駒の沓(くつ)あらためん橋の霜　　湖春

これも愛誦せし一句なり。霜の美を認めたるはさる事ながら、それがために駒の沓を正すとまでは何人も思はざるべし。これ誇張なり。

朝顔に釣瓶(つるべ)取られてもらひ水　　千代

この句を好みしは擬人法を用ゐし処にもありしなれど、主として朝顔の美を誇張的に現さんとしたる処にありき。この句の欠点は誇張的の処、擬人法を用ゐし処のみならず、その外にもあり。

鰯(いわし)焼く隣にくしや窓の梅　　秀和(しゅうわ)

この句は誇張の程度少くして前の諸句に勝りたるだけ、最初は予を感ぜしめず、やや進んで後漸くこれを感ず。その感じたるは「憎しや」の一語あるに因る者にして、この一語即ち誇張の処、即ちこの句の欠点なり。

誇張は写実の反対なり。誇張を好む者写実を解せず、写実を解する者誇張を好まず、固よりその理なり。

●●●●●●●●●●

（六）　語句の上に巧を弄する句　趣味の上において写実的自然を好まず、詐偽的誇張を愛したるが如く、語句の上にも平易なるよりはむしろ技巧を弄（もてあそ）びたるを喜べり。

これは〳〵とばかり花の吉野山　　貞室

当時はスペンサーのエコノミー・オヴ・メンタル・エナージーといふ謬論を信じゐたる故、この句は美麗といはずして美麗を現したりとて感心せり。されどそは理窟上の解釈にして、その実予は世人一般の如くはこの句を愛せざりしと思ふ。

舟呼べばたゞ川霧の答かな　　昌琢（しょうたく）

「川霧の答」といふ無理な言葉に感ぜしならん。

涼しさのかたまりなれや夜半の月　　貞室

「涼しさのかたまり」といふいやな言葉を手柄のやうに思ひしなり。

白魚や椀の中にも角田川

やうの厭ふべき句を好みたるは、僅に俳句に入りて月並調を解したる時なり。

（七）　雑　これらの外に予の感じたる句を挙げんに

鳥一羽濡れて立ちけり朝桜

『類聚』に出でし句と覚ゆれど、予のはじめこれを見て艶麗の感に堪へざりしは、春水の『梅暦』の中にありしなり。当時『梅暦』を愛せし余波は俳句に及びて、この俳句を見るごとに幾多の聯想に打たれたるにやあらん。この句清婉なれども品格卑し。

秋やけさ一足に知るぬぐひ縁　　重頼

言葉つき気に入らで、はじめは感服せざりしが、後に立秋を足の裏に感ずる処に感服せり。しかし善き句に非ず。

むつとして戻れば庭に柳かな　　蓼太

端唄（はうた）にて感心したり。この句厭味の頂上なり。

行き〳〵て倒れ伏すとも萩の原　　曾良（そら）

情の極端を現してかつ萩の美をいへる処に感心せり。これは悪句にあらず。

長々と川一筋や雪の原　　凡兆

この自然の句、初めは感ぜざりしが、後漸くこれを感ずるに至れり。これらや予が自然に入るの階梯（かいてい）なりしならん。

以上論ずる所は予が入門の第一歩にして、第二歩以後なほ幾多の邪路に迷ひしは言ふまでもなし。予が進歩の順序をいはば、初め貞徳派、天保調などに入り、次に『三傑集』一部によりやや天明、寛政を覗ひしも、僅に蓼太の俗調を称讃せしに過ぎず。漸く『七部集』（殊に「猿蓑」一）に眼を開き、始めて元禄の貴ぶべきを知れり。その後あるいは『五色墨』に擬し、あるいは文化、文政に摸する所ありしが、終に蕪村に帰著す。予の進歩は近時の俳人の如く一躍して堂に上るが如き快事に遭遇せず、一歩々々刻苦に刻苦して漸くに進みたる者なれば、著き変遷は固よりあるべきはずなけれど、『七部集』を見て言ふべからざる愉快を感ぜし時は、始めて夜の明けたるが如き心地に、大悟徹底あるいはこれならんかなど、いたづらに思ひ驕りし事を記憶す。とにかく予が理窟を捨てて自然に入りたるはこの時なり。写実的自然は俳句の大部分にして、即ち俳句の生命なり。この趣味を解せずして俳句に入らんとするは、水を汲まずして月を取らんとするに同じ。いよいよ取らんとしていよいよ度を失す。月影紛々終に完円を見ず。

（明治三十二年二月）

青空文庫情報

底本：「俳諧大要」岩波文庫、岩波書店
1955（昭和30）年5月5日第1刷発行
1983（昭和58）年9月16日第2刷改版発行
1989（平成元）年11月5日第8刷発行
初出：「ほとゝぎす　第二巻第五号」
1899（明治32）年2月
※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。
入力：酒井和郎
校正：岡村和彦
2016年9月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俳句の初歩

正岡子規

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/